

山科本願寺跡 発掘調査現地説明会資料

平成26年8月30日

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査地：京都市山科区西野山階町

調査期間：平成26年7月22日～9月下旬（予定）

調査主体：京都市文化財保護課

調査面積：250㎡（反転後含む）

はじめに

今回の調査は山科本願寺跡の第21次となる発掘調査であり、遺跡の保存を前提とした確認調査です。

山科本願寺は文明10年（1478）、浄土真宗中興の祖である蓮如が造営しました。御本寺・内寺内・外寺内の3郭からなり、周囲に土塁と堀をめぐらせた城塞都市で、複雑な「折れ」を持った外郭線は戦国大名の城郭を先取りした最先端の構造でした。天文元年（1532）に法華宗・近江（現 滋賀県）半国守護六角定頼^{ろっかくさだより}などの連合軍による攻撃を受けて焼亡するまで、蓮如^{れんにょ}・実如^{じつにょ}・証如^{しょうにょ}の三代およそ50年にわたって繁栄を極めました。

近年の調査では石風呂が発見されるなど、宗主の私的空間の展開が解明されつつあります。今回の調査地は御本寺の西端、石風呂を検出した調査区の北隣に当たり、土地利用の実態解明が期待されました。

調査の概要

・土塁

今回の調査では、残存土塁のうち御本寺の西を画する土塁を調査しました。御本寺側となる東側斜面は後世の削平により上半が残存しませんが、調査の結果、東斜面の裾を検出し、構築時の土塁の傾斜を確認できました。構築時の土塁は現存高（標高約43.5m）よりも2m程高い、標高約45.5mに復元できます。内からの比高が約4m、外からは約5mとなり、御本寺の中心部も非常に大規模な土塁で囲んでいたことが分かります。

また、土塁の内側で排水用の溝を検出しました。この溝の埋土には焼土や炭が含まれておらず、山科本願寺が焼亡した天文元年（1532）時点では既に埋められていました。

・建物跡

掘立柱建物を3棟検出しました。建物1は調査区の北に展開すると考えられます。柱穴には焼土・炭を含み、山科本願寺が焼亡した天文元年（1532）に焼けた建物だと分かります。建物2は調査区の南に展開すると考えられ、東西2間、南北2間以上に復元できます。建物1と同様に山科本願寺焼亡時に建っていたものです。建物3は建物2に重なっ

て検出し、柱穴に焼土・炭を含まないことから建物2の建築以前に壊されたものでしょう。

建物2の柱穴は土塁の排水溝が埋められた後に建てられています。土塁構築当初のプランをある段階で変更し、排水溝を埋めることで土塁際に建物を建てたことが分かります。

調査区の東半は整地面が西側よりも一段高くなっており、ここで上面が平らな石を検出しました。対になるものを検出できていないため、どの程度の規模になるかは不明ですが、礎石建物があつた可能性があります。

・堀跡

南北方向の堀1と東北東から西南西への斜め方向の堀2を検出しました。両者とも幅は3m近くあり、一部を断ち割った結果、1.6m以上の深さになりました。新幹線の南側の調査で同様の堀が見つっていますが、御本寺中心部で確認されたのは初めてです。これらの堀を埋めて、宗主空間を拡大させています。

まとめ

今回の調査成果では土塁と濠で囲まれた御本寺内部が時代とともに変化していく様相を明らかにすることができました。

山科本願寺では創建から焼亡までの間に何度かの大規模な改修があつたと考えられていますが、堀や溝を埋め立てて建物を建てたことが明らかになったことで、考古学的にも改修を裏付けることができます。大規模な堀を埋め立てたり、土塁から流れてくる雨水の処理を犠牲にしてまで、宗主空間を拡大させています。山科本願寺中心部の土地利用を考える上で非常に重要な成果です。

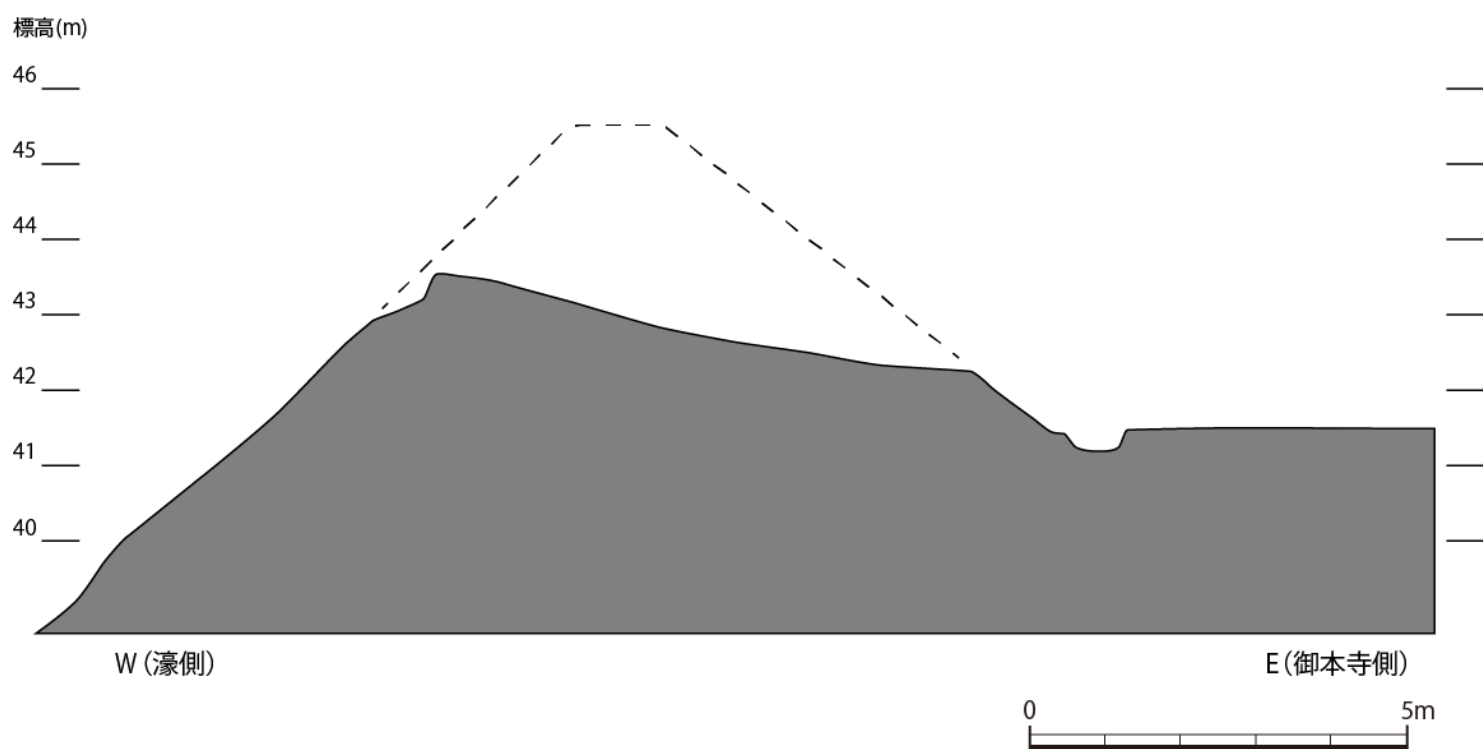


図1 土塁断面図(S=1/100)

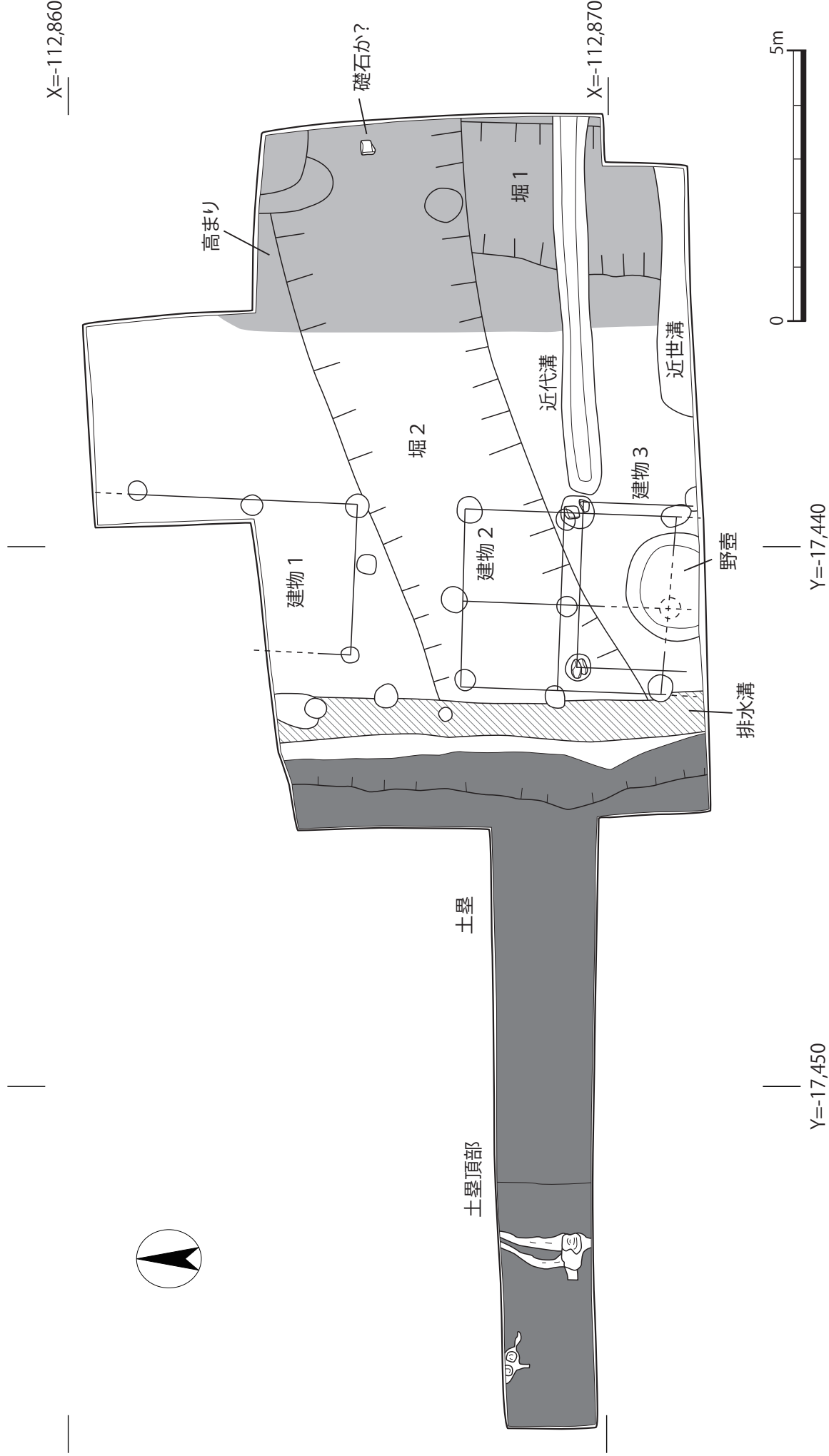


図2 調査区平面図 (S-1/100)

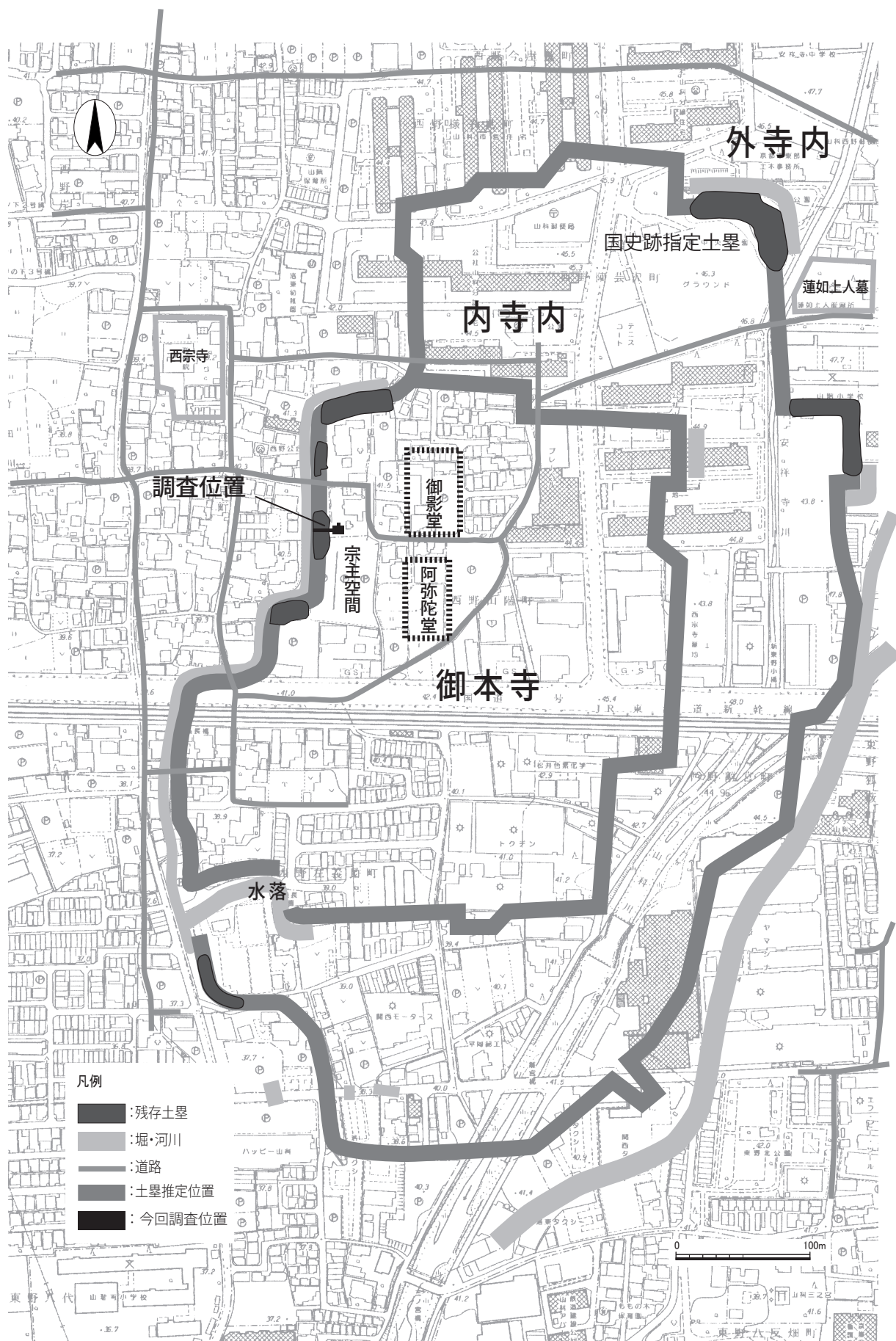


図3 山科本願寺と調査位置